

研 究 報 告

アメリカにおける史跡整備と巡礼ー日系アメリカ人収容所（跡地）をめぐって

加 藤 好 文

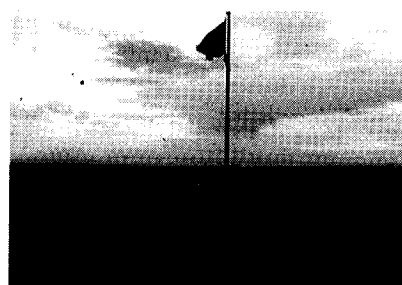
は じ め に

現在、科研「四国遍路と世界の巡礼、その歴史的諸相の解明と国際比較」の共同研究分担者として「アメリカにおける史跡整備と巡礼」というテーマを掲げて研究を行っている。なかでも、今回「日系アメリカ人収容所（跡地）をめぐって」という副題を付したように、第二次世界大戦中にアメリカ西海岸に住んでいた日本人及び日系アメリカ人の約12万人が「軍事上の必要性」を理由に強制立ち退きを命じられ、自主的に他地域へ引っ越した人を除く11万人余りがRelocation Center「転住センター」（別名、Internment Camp「強制収容所」）に収容された問題を地域文化史的視点から考察しているところである。

最初に、これまでの研究の経緯をまとめておきたい。筆者は現在の巡礼研究に先立つ科研「カリフォルニア研究」（2002年度～2005年度）を進める過程で、まず2003年8月～9月の約40日間に亘ってカリフォルニア州サクラメントに滞在し、カリフォルニアの歴史と文化に関するフィールド・リサーチを行った。その際、松山・サクラメント姉妹都市協会会員であるサクラメント在住日系アメリカ人との交流の機会に恵まれ、初めて第二次世界大戦中の日系人強制収容のことに興味を持つようになった。そこで改めて2004年9月に訪米した際、ロサンゼルスから車で4時間ほどかけて奥地に入った山間に広がるマンザナー（Manzanar）収容所跡を訪問した。そこは背後にホイットニー山（Mt. Whitney）が聳えるシエラネバダ山脈の麓でありながら、東隣はデスバレーと接する砂漠化した場所であった。現在、国立史跡（National Historic Site）として整備中ではあるが、その荒地でかつて生活した人びとに思いを馳せながら、収容所開設中の1943年に建立されたという「慰霊塔」を前にしてしばし呆然となってしまった。私の日系人研究の原点はまさにこの瞬間にあると言っても過言ではない。その後も、姉妹都市協会の方々との親交を深め、フィールド・リサーチを重ねながら、研究を続けてきた。その一環として、2006年7月初めにユタ州を訪ねた際、セントラル・ユタに位置するデルタという町の外れにあるトパーズ（Topaz）収容所跡をやっとの思いで突き止めたのは望外の喜びであった。尤も、そこはマンザナーよりはるかに荒涼とした風景が広がり、小さな記念碑のそばにアメリカ国旗が風にはためいていた夕暮れ時の印象は今でも忘れることができない。



マンザナー慰霊塔



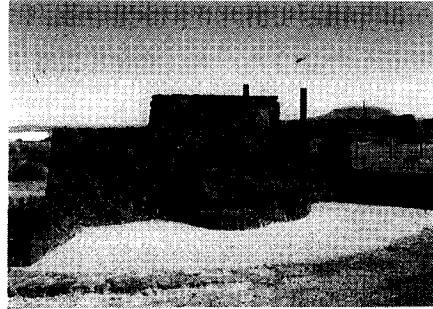
トパーズ収容所跡

さて、今回の科研へと発展した研究テーマでの現地調査を2008年3月中旬に実施したのだが、その際の収穫としては、2004年に続いて再度訪問したマンザナーでは、収容所跡地の整備（復元）がさらに進んでいる様子を垣間見ることができた。またアメリカ東部にも移動して、アメリカの歴史の原点とも言えるワシントンDCやペンシルバニア州ではアメリカ国家としての基本的理念が表象された「聖地」を肌で触れる機会にも

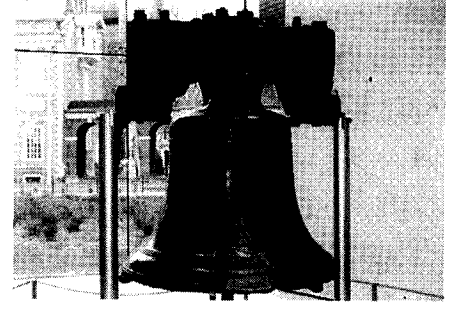
恵まれた。さらに2008年10月にも、念願だったトゥーリレイク (Tule Lake) 収容所跡を訪ねる旅を決行した。ここは当時あった10箇所の転住センターのなかでも唯一の隔離施設 (アメリカに対する「不忠誠組」というレッテルを貼られた人びとの収容所) で、筆者は最初のサクラメント滞在中に知り合ったユカリ・シライさんの父親ノボル・シライ氏 (一世) がその収容所体験談として出版したメモワールを読んでいたし、同じくトゥーリレイクに収容された経験を持ち、現在はニューヨーク在住の日系人路上画家ジミー・ツトム・ミリキタニ (帰米二世) の人生を辿った映画 *The Cats of Mirikitani* 「ミリキタニの猫」 (2006年) を観ていたこともあり、ぜひともこの目で確認したい所だったのである。以上のようなフィールド・リサーチ等の成果も踏まえて、以下では、収容所 (跡地) をめぐる日系人アイデンティティの顕現と巡礼地としての位置付けについて若干の考察を試みることにする。



復元されたマンザナー監視塔



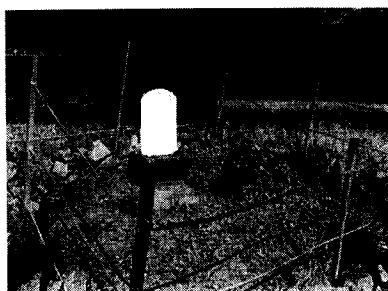
トゥーリレイク記念碑



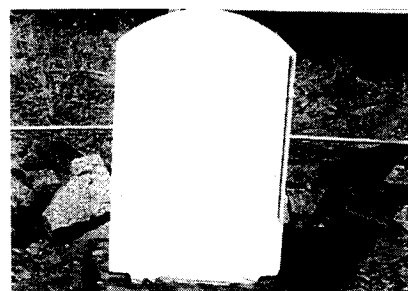
自由の鐘 (ペンシルバニア州)

日本人移民と収容所

日系人学者 Azuma 氏はその著 *Between Two Empires* のなかで、19世紀後半から20世紀初めにかけてのアメリカの拡張主義政策と日本の帝国主義的行動が交錯するアメリカ西部地域という地政学上重要な地において、原住民と移民との間で土地をめぐる闘いが展開されたことを指摘しつつ、しかしながらアングロ・アメリカン支配体制は揺るぎなく、アジア系やメキシコ系が差別や排除の対象であったことを看過していない。特に、日清および日露の両戦争に勝利した日本に対するアメリカの警戒心は強いものがあつた。そのような歴史において、明治維新直後の1869年に初めてアメリカ本土カリフォルニアに集団移住した会津若松移民団のなかで、現在にまでその名を留めているのがオケイ (Okei) という1871年に19歳の若さで病死した女性であろう。20世紀になってカリフォルニア州ゴールドヒルの地にて彼女のお墓が発見されたのを契機に、1930年代に入るとその墓石はたくましい開拓者精神を物語る有形の歴史的指標として、特に日系人にとっての「聖地」に格上げされて今日に至っている。このような先人の後を追って19世紀末から20世紀初頭にかけて多くの日本人がアメリカの地を踏み、人種差別に耐えながら日系人の生活基盤を築いてきたのである。彼らの日常生活の一端は、カリフォルニア州オークランドで生まれた日系二世の作家トシオ・モリ (Toshio Mori) が家業であるナーサリーの仕事の合間に書きためたという作品にも窺うことができる。



オケイの墓全景



オケイの墓拡大

The people of Lil' Yokohama are here. *Here, here*, they cry with their presence just as the youngsters when the teachers call the roll....Today young and old are at the Alameda ball grounds to see the big game: Alameda Taiiku vs. San Jose Asahis. The Northern California game is under way....At eleven thirty-six Mr. Komai dies of heart failure...His wife is left with five children. The neighbors go to the houses to comfort the family and assist in the funeral preparations....Down the block a third-generation Japanese American is born. A boy. They name him Franklin Susumu Amano. (*Yokohama, California* 71-74)

モリが敬愛するアメリカを代表する作家アンダソン (Sherwood Anderson) の代表作 *Winesburg, Ohio* (1919) の形式を模して、カリフォルニア州ヨコハマ町という架空の日系人コミュニティを設定し、恐らくは戦前の1930年代ころかと思われる時代に生きる人びとの極めて日常的な生活風景を描写した連作短編集である。上記引用部分からも、住人たちが野球観戦に興じる様子や、隣人の死とか子どもの誕生などに関して詳細な情報が瞬時に伝わる緊密な共同体の性格が読み取れるであろう。

しかしこのような一見平和な日常生活も、日米開戦により、一転根こぎにされる事態に陥ることになる。1941年12月に真珠湾を攻撃されたアメリカは、翌42年2月に大統領行政命令第9066号を出して、「軍事上の必要性」と「保護」を名目に、西海岸に住む日本人および日系人に対して居住区域からの強制退去・強制移住という超法規的措置を強行することになる。慌ただしく引っ越し準備をする日系人家庭の様子は、同じく二世作家ヨシコ・ウチダ (Yoshiko Uchida) の自伝に垣間見ることができる。

As our packing progressed, our house grew increasingly barren and our garden took on a shabby look that would have saddened my father. My mother couldn't bear to leave her favorite plants to strangers and dug up her special rose, London Smoke carnations, and yellow calla lilies to take to a friend for safekeeping....Gradually ugly gaps appeared in the garden that had once been my parents' delight and, like our house, it began to take on an empty abandoned look. Toward the end, my mother sat Japanese fashion, her legs folded beneath her, in the middle of her vacant bedroom sorting out the contents of many dusty boxes that had been stored on her closed shelves...

(*Desert Exile* 62-63)

スパイ容疑で抑留中の父親不在のさなか、ヨシコと姉、母の三人による荷造りが行われ、その家や庭が変わり果てて行く様は "barren", "shabby look", "ugly gaps", "empty abandoned look", "vacant bedroom" などの言葉に如実に表れているように思われる。しかもこれら一連の言葉は、眼前の現実描写の域を超えて、彼女たちの心情を捉えたものと見なしても差し支えないであろう。まさに彼女たちの心が抉られ、「醜い穴」(ugly gaps) が覗いているのである。果たして、彼女たちは転住先でその穴を修復し、通常の生活を営むことができたであろうか。もちろん、転住先が人里離れ砂漠化した場所で、プライバシーもほとんどなく、有刺鉄線に囲まれ監視兵付きの収容所であったことをすでに知っている私たちには、それは空しい願いであり、大方はその幻影に過ぎなかったことは容易に想像できる。ましてやこのようなアメリカの政策の根底に人種差別意識が働いていた事実は覆うべくもない。

しかしながら、いかなる悪環境にあらうとも、その「醜い穴」を少しでも美しく飾り、人間的な生活を演じようとした日系人たちの努力と日本的感性には目を見張るものがある。それがどのような形をとっているか、いくつか事例を拾ってみよう。先述したウチダ一家が恒久的な Relocation Center に移る前に、1942年の春から数ヶ月間収容された仮の施設 Tanforan Assembly Center の描写がある。

Although we knew that Tanforan was only a temporary home, we all worked constantly to make the windswept racetrack a more attractive and pleasant place. Dozens of small vegetable and flower gardens flourished along the barracks and stables, and a corner of camp that once housed a junk pile was transformed into a colorful camp garden of stocks, sweetpeas, irises, zinnias, and marigolds. A group of talented men also made a miniature park with trees and a waterfall creating a small lake complete with a wooden bridge, a pier, and an island. It wasn't much, but it was one of the many efforts made to comfort the eye and heart. (*Desert Exile* 93-94)

本来、Tanforanは競馬場として使用されていたサンフランシスコ湾岸の施設で、戦争開始直後、取り敢えず日系人の集合センターに転用された場所である。このような収容施設は西海岸を中心に全部で16箇所用意され、内陸部に建設中の転住センターが完成するまでの数ヶ月間、彼らの一時的な生活場所とされたのである。上掲の描写にも見られるように、人びとはこうした非人間的な生活環境を少しでも良くするために、いろいろな野菜や花々を植えて彩り豊かにし、さらには小さな日本庭園もどきの憩いの場までも作り上げるのである。

一方、三世のヒューストン（Jeanne Wakatsuki Houston）は幼い頃のManzanar Relocation Centerでの思い出を次のように綴っている。

The nearest peaks rose ten thousand feet higher than the valley floor, with Whitney, the highest, just off to the south. They were important for all of us, but especially for the Issei. Whitney remind Papa of Fujiyama, that is, it gave him the same kind of spiritual sustenance. The tremendous beauty of those peaks was inspirational, as so many natural forms are to the Japanese (the rocks outside our doorway could be those mountains in miniature). They also represented those forces in nature, those powerful and inevitable forces that cannot be resisted, reminding a man that sometimes he must simply endure that which cannot be changed. (*Farewell to Manzanar* 88)

特に一世の人たちは、アメリカ合衆国本土で最高峰のMt. Whitneyを日本の富士山に重ね合わせることで、その美しく神々しい偉容から精神的な支えとしての霊力を得ると同時に、人を圧倒する力強さから現状に耐える力を引き出していたのである。いかにも日本的な発想ではないだろうか。

同じくカリフォルニア州最北端に位置したTule Lake Relocation Centerについては、シライ氏のメモワールから引いてみることにする。



マンザナー資料館とホイットニー山

We don't know who coined the Japanese word for Tule Lake. It consisted of three Japanese characters (kanji): "crane," "mountain range," and "lake." This combination was both imaginative and accurate. The camp sat at the bottom of a dry lake. Castle Rock loomed over the entrance to the camp, and Abalone Mountain rose behind it. No cranes visited Tule Lake, but every fall thousands of wild geese and ducks flew to a nearby lake in a wildlife preserve....On moonlit nights when I strolled around the camp, their cries made me feel miserably lonely and homesick for my motherland. I began to understand how Nakamaro Abe must have felt when he was in China many years ago and gazed at the autumn moon. (*Tule Lake* 62-63)

当時のシライ氏は日本への帰国を希望していたようで、そのために、ここがいわゆる「不忠誠組」の隔離施設に指定された1943年以降も、一家はアメリカに対するシンパシーを持っていたにもかかわらず最後までこの収容所に留めおかれることになる。お城の形をした Castle Rock Mountain やアワビに似た Abalone Mountain、そして野鳥保護区の湖上を飛ぶ野生の雁、鴨などを人びとは見上げつつ、「鶴嶺湖」という漢字を当てられた美しい景観と秋の風情を短歌や俳句に詠んで塞ぎがちな気分を慰めたのであろう。因に、シライ氏は野鳥の鳴き声に孤独感を募らせ、祖国日本へのホームシックに襲われたようである。



Abalone Mountain(手前)と
Castle Rock Mountain(奥)



トゥーリレイクの湖

しかしとりわけ一世にとっては、結局、当時の忌まわしい体験を経て、自らのアイデンティティを確認したことも確かなようである。*Yokohama, California* のなかで、一世の祖母が孫に向かって自らの思いを語って聞かせる場面がある。

See, my face and hands are wrinkled, my hair gray. My teeth are gone, my figures bent. These are of America...I like the dirty brown hills, the black soil and the sandy beaches. I like the tall buildings, the bridges, the parks and the roar of city traffic. They are of me and I feel like humming....Your grandma wants to be buried here in America...I belong here....War has given your grandmother an opportunity to find where her heart lay.

(*Yokohama, California* 20-21)

これは祖母が収容所生活を送っていた時のシーンと思われるが、彼女は若かりし時に日本を発ってアメリカに移住し、長い年月をアメリカで暮らした証が心身に刻まれていく。そして皮肉にも日本との戦争と収容所暮らしという現実の後押しされるかのように、彼女は自らの帰属場所はアメリカであることを実感し、アメリカ人としてのアイデンティティを確認するのである。

収容所跡巡礼とアイデンティティ

さて上述したような日系人たちの収容所暮らしは日本の敗戦によって終わりを告げることになるが、戦争の勃発によって心に開いた「醜い穴」を彼らが戦後も引きずることになるのは、ある意味当然と言わねばならないだろう。その苦悩とそこからの脱出を語ったのがヒューストンの次の一節である。

Papa's life ended at Manzanar, though he lived for twelve more years after getting out. Until this trip (1972) I had not been able to admit that my own life really began there. The times I thought I had dreamed it were one way of getting rid of it, part of wanting to lose it, part of what you might call a whole Manzanar mentality I had lived with for twenty-five years. Much more than a remembered place, it had become a state of mind. Now, having seen it, I no longer wanted to lose it or to have those years erased. (*Farewell to Manzanar* 176)

このようにヒューストンの父親の人生は実質マンザナーの地で幕を下ろしたことが語られるとともに、彼女自身も“Manzanar mentality”というトラウマに悩まされる日々が続いたのである。部外者には計り知れない精神的な苦悩であったろう。しかし、引用文中にもあるように、1972年になってその収容所跡地を訪れることによって、自分の人生はここからスタートしたのだということをやっと素直に認めることができたのである。そしてそこで生活も自分のアイデンティティの一部として受容できたのである。行間を読めば、このように彼女個人としても、また家族にとっても「忌まわしい収容所」ではあっても、人生の一時期を過ごした大切な場所を自らが確認し、死者たちに思いを馳せ、そして祈りを捧げるなどの行為こそが、戦争で生じた人生の破断部分をつなぎ合わせ心の隙間を埋め合わせる上で避けて通れない重要な「儀式」だったということになるだろうか。癒しを求めて自己確認の旅を決行するまでに25年という長い歳月を要したのである。

ところで、Pilgrimage（巡礼）の意味をOEDで調べてみると、基本的には「宗教的な献身行為として、ある神聖な場所（sacred place）に赴く旅」と定義されているのだが、さらには「ある敬虔な目的（pious purpose）を持った旅や、ある人あるいは出来事と結びついて大切にされている場所を訪れる旅」も巡礼行為とされている。少なくとも後者の意味において、収容所跡への旅はまさに巡礼と呼ぶに値する行為ではないだろうか。世界の巡礼研究の第一人者 Ian Reader 氏は、“Pilgrimage, then, involves restoring the incomplete and painful ruptures of the past, healing the wounds of bereavement, loss and disruption, and making the participant(s) whole.” (*Pilgrimage in Popular Culture* 222) と述べて、参加した者たちが不完全で痛ましい過去の裂け目を修復し、死別・喪失・崩壊の傷を癒し、完全な状態になるための行為も巡礼に含まれる点を指摘している。だとすれば、収容所跡への旅は、まさに過去の“ruptures”を修復し、さまざまな“wounds”を癒すことで、アイデンティティの所在確認を行うという「敬虔な目的」を持った行為として巡礼の範疇に入ることになるだろう。さらに言えば、このような収容所体験者やその関係者だけに留まらず、収容所跡地という特定の場所を訪れるその他一般の人びとに何らかのシンパシーのようなものを喚起させ、自己省察を促す場として機能するとすれば、そのような人びとにとっても、そこは巡礼地なのである。

Reader氏はまた、ヨーロッパで盛んな聖地巡礼や日本の四国遍路などだけでなく、世界のポピュラーカルチャーのなかにも同様のものを認めて「巡礼」を幅広く捉えており、アメリカに関わっても示唆に富む指摘を行っている。

There are some differences between different forms of pilgrimages in terms of pilgrimage lore, legend and the incidence of miracles. Certainly those that centre around either overtly and explicitly religious themes (as with Compostela and Shikoku) or around genuinely 'famous' heroic figures (such as Elvis, or Glastonbury, with its Arthurian legends), appear to differ from the more secularized pilgrimages that have emerged from the sphere of civil religion, such as war cemeteries, the Custor and Vietnam Memorial sites, and Anfield.

(*Pilgrimage in Popular Culture* 227)

宗教的テーマや英雄的人物などに焦点を当てた巡礼形態に対して、19世紀末のネイティブ・アメリカンと白人騎兵隊との壮絶な闘いやベトナム戦争などに関係した戦争墓地や記念碑など、いわゆる「市民宗教」（civil religion）との関係からアメリカ各地に整備された場所を訪れる行為を「世俗的巡礼」として、巡礼の範囲を広げて解釈したものである。アメリカの場合、特定の宗教教団を超えて国民的アイデンティティの支えとなるような、政治的色合いを帯びた歴史的に重要な場所などがその対象となる。言うなれば、アメリカ合衆国としての存立基盤に関わる基本的な理念が表象された場と要約できようか。

例えば第二次世界大戦時に、アメリカ西海岸在住の日本人および日系アメリカ人すべてを一網打尽に強制収容するという出来事は、いくら「戦時ヒステリー状態」にあったにせよ、正当な法的手続きを取らない人権を無視した行為であり、しかもその3分の2がアメリカ市民であってみれば言わずもがなである。次のシライ氏の言動は、日系人にかぎらず世界各地からアメリカに渡った移民たちの共通した思いであり、また当然の権利でもあろう。

Now it was ironic that we Japanese and our offspring who had been treated so badly by America loved this country in spite of it all. Even if America had forsaken us, we would not forsake America. We worked hard to abrogate the anti-Japanese immigration bill and succeeded in lifting the shame that had hung over Japanese people everywhere.

(Tule Lake 206)

アメリカに見捨てられながらも、そのアメリカを生涯愛し続けた一世の敵性外国人（enemy alien）とアメリカ市民である二世（non alien）たちは、戦後、戦時中に被った人権侵害と人種差別に抗議の声を上げ、その補償を求める闘い（リドレス運動）を展開するなかで恥辱を晴らすことに奔走したのである。その結果、最終的には1988年にCivil Liberties Act「市民的自由法」成立の運びとなり、レーガン大統領による公式の謝罪が行われ、一人当たり2万ドルの補償がなされたのである。ここで「アメリカ的正義」の機能が正常に働いたものと言えよう。このことは独立宣言や合衆国憲法に明記された「自由」と「平等」の基本的理念に対する不断の監視とその実践につながる一つの大きな成果であって、その意味からも日系人収容所跡は今後を受け継がれ語り継がれて行くべき重要な史跡なのである。

収容所跡の聖別化

人文地理学分野の優れた研究者である Kenneth E. Foote 氏は *Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy* において、アメリカ史上、戦争を含めた暴力的行為による悲劇がアメリカの景観にどのような痕跡を残し、またどのような形で後世への警鐘としているかを具体的に論じている。そのなかで著者は、アメリカの強制収容所という「不正義」的の事件にも言及して、その跡地が史跡として整備されつつある状況を踏まえ、その場が聖別化される可能性を指摘している。それは、建国の理念として標榜される「自由」と「平等」の精神に基づくアメリカ的民主主義がいとも簡単に踏みじられた過去の出来事を風化させないためにも、その記憶を景観にしかと刻み込む不断の努力の延長上に実現されるものであろう。一部を引用しておこう。

Here then is a lesson that should be inscribed on landscape as a way to remind us of the fragility of the civil rights taken for granted in American democracy, the lesson that the government can make terrible mistakes when it allows the hysteria of the many to violate the rights of the few... How the relocation centers will develop in future years is an interesting question. Designation in the 1970s could lead to sanctification now that the Civil Liberties Act has been passed. It could be argued that some of these sites, such as Manzanar and Topaz, are already well on their way. At both sites the commemorative markers spell out exactly why the sites are significant: "May the injustices and humiliation suffered here as a result of hysteria, racism, and economic exploitation never emerge again," reads the inscription at Manzanar. (*Shadowed Ground* 305-8)

このような「正義」に反する強制収容という人権侵害がアメリカの景観に永遠に刻印される意義は極めて

大きいものがある。その地はアメリカという国が原点に戻って建国の理念を改めて自覚し、自らのアイデンティティを意識するための大切な場所を意味するからである。現在の収容所跡地は、日系人にとってはアイデンティティを確認し、死者の霊を慰め、癒しを得るための聖地であり、合衆国にとっても、建国の父祖たちが築いたアメリカ的正義の検証場所としてかけがえのない聖地となるはずで、Reader氏言うところのまさに世俗的巡礼地につながる神聖な場所であろう。

おわりに

2008年は、1988年にアメリカ政府が強制収容を被った日系人への公式謝罪を行ってから20周年の節目に当たる年であった。「マンザナル・ピルグリメッジ」と題された南加日系商工会議所イベント情報によると、恒例の収容所巡礼の旅が4月26日に行われたとのことである。総勢300人が現地を訪れ、慰霊塔への各宗教からの法要に続いて、太鼓の音頭での盆踊りなど、一連の行事が執り行われたそうである。そのなかでも筆者の目に留まったのが、「今回の巡礼の旅には100人のイスラム教の参加者を迎えて、同じような経験を繰り返さないようにとの誓いを確認した」との一文であった。それを見て、2001年9月11日に同時多発テロが起こった際に、イスラム教徒の「収容」という話しが流れていたことを思い出してしまった。しかしその時は、日系人が被った過去の歴史が抑止力となって実行されなかったとも聞く。こうした意味からも、人間の記憶と痛みが時の経過とともに薄れていかにないように、収容所跡地をアメリカの原風景の一つとして整備し、景観にもその歴史をしかと刻んで後世に継承していくべきであることを改めて痛感した次第である。

【参考文献リスト】

- Azuma, Eiichiro. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*. New York: Oxford UP, 2005.
- Foote, Kenneth E. *Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy*. 1997. Revised and Updated. Austin: U of Texas P, 2003.
- Houston, Jeanne Wakatsuki and James D. Houston. *Farewell to Manzanar*. 1973. Boston: Houghton Mifflin, 2002.
- Inada, Lawson Fusao, ed. *Only What We Could Carry: The Japanese American Internment Experience*. Berkeley: Heyday Books, 2000.
- Reader, Ian and Tony Walter ed. *Pilgrimage in Popular Culture*. Wiltshire: Palgrave, 1993.
- Shirai, Noboru. *Tule Lake: An Issei Memoir*. 1981. Tr. Ray Hosoda. Ed. Eucaly Shirai and Valerie Samson. Sacramento: Muteki P, 2001.
- Mori, Toshio. *Yokohama, California*. Caxton, Idaho: Caxton Printers, 1949. Seattle: U of Washington P, 1985.
- *The Brothers Murata: A Novel*. 1944. *Unfinished Message; Selected Works of Toshio Mori*. Berkeley: Heyday Books, 2000. 139-205.
- Uchida, Yoshiko. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*. 1982. Seattle: U of Washington P, 1993.
- JCCSC (南加日系商工会議所) Web Site. 8 Sep. 2008 <http://www.jccsc.com/jp/>
- 植木照代・ゲイル・K・佐藤編『日系アメリカ文学—三世代の軌跡を読む』（創元社、1997年）
- 野崎京子『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』（世界思想社、2007年）
- 村上由見子『アジア系アメリカ人—アメリカの新しい顔』（中公新書、1997年）
- 森 孝一『宗教からよむ「アメリカ」』（講談社、1996年）